

NPO 法人環境パートナーシップいわて 第 11 回通常総会 総会記念公開講演会
「愛・地球博から岩手の未来へ」～総合環境力による共生まちづくり～

講師：環境システム研究所 代表取締役 原田 鎮郎 氏

日時：2014 年 6 月 22 日（日）15：00～17：00

会場：サンセール盛岡 3 階ホール

進行（櫻井）：それではただいまより、開会いたします。開会にあたり、NPO 法人環境パートナーシップいわて代表理事野澤日出夫よりご挨拶と原田先生のご紹介を申し上げます。

野澤代表理事：本日は多くのイベントが重なっている中で、記念公開講演会にご参加いただきありがとうございます。環境パートナーシップいわてはちょうど昨年 10 周年を迎え、アイーナを拠点とする環境学習交流センターの運営、岩手県地球温暖化防止活動推進センターの指定を受け活動をしております。昨年は特に 10 周年記念誌の発行、再生可能エネルギーフォーラム、三陸復興フォーラム in 大槌などを実施して参りました。

本年度は特に、NPO としてもっと信頼性の高い団体にしていこうと、「認定 NPO」に向けて動いており、今年度は「仮認定」を受けて新たなスタートを切っております。認定 NPO となるためには、活動に協賛していただける方々 100 名、一口 3,000 円以上の寄付を集めなければなりません。毎年これをクリアしなければならないため、ぜひ皆様のご協力をいただきたいと思います。

環境の保全と経済活動というのは今まで対立軸で語られてくるが多かったのですが、両立させることが将来に向けて大事だと考えます。また、これは持続的な社会への必要条件であります。

昨年 12 月に三陸復興フォーラムを開催し、横浜国立大学鈴木学長、野村総研顧問の増田前知事、本日お越しいただいている原田先生にもご参加いただきました。ご案内の通り、「総合環境力」というキーワードを使って世界的な活動をされ、特に環境と共生しながら目標を達成していく手法を生み出しておられます。最も知られているところで「愛・地球博」の会場づくり、沖縄で開催された海洋博会場なども手掛けられております。震災以降、被災地へ何度も通われて、各市町村長へ環境共生型の提案もされています。

本日は、「愛・地球博の理念、総合環境力による岩手の共生まちづくり」についてご講演いただきます。それでは原田様よろしくお願いたします。

—— 原田氏講演 ——

こんにちは。日曜日でお休みのところをお越しいただきありがとうございます。野澤さんよりご紹介がありましたが、12 月に開催されたフォーラムでお話しする機会をいただきましたが、その時は 15 分間だったため、改めて話をする機会としてお声掛けをいただいたようです。

環境と地域の活性化というのは相反すると捉えられてきましたが、それではこれからの日本社会全体がどう進むべきかという方向性が見いだせない。私自身もきちんとした答えを集約しているわけではありませんが、一つの可能性として、皆さんのお考えになるきっかけづくりが出来ればと思っております。

今日は「銀河鉄道東北本線」という講演のタイトルを考えて、なかなか良いタイトルだなと思っていたのですが、盛岡駅に着いたら、「銀河鉄道岩手線」の看板があり、そちらの方が良いかなと思いました。もちろん宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」からタイトルをいただいているわけですが、銀河 galaxy、星屑、星雲、きら星のごとく輝く星が集まった明るい未来に、どのようなルートで進んだらよいのか

という道筋を示す、線路を探していきたいと思っております。決してこの線路は、新幹線のような直線のまっすぐで、超高速のスピードで進むものではなく、各駅停車のようなものだと思います。けれど、しっかりと未来に向かっていくものだと思います。そういう星たちに出会いながら、未来に向かって進む、方向を探して行きたいと思えます。

野澤さんを通して東北とのつながりができたわけですが、簡単に野澤さんとのつながりを申し上げたい。今、野澤さんからもお話しがありましたように、最初のつながりは、2005年の愛・地球博、建設の途中だったと思います。2002年、各国のパビリオンの中のイギリス館の庭園、イングリッシュガーデンを小岩井さんがデザインされて、施工されるということで打合せにいらした時が最初でないかと思えます。グローバルーフという話がありましたが、真ん中のスケッチが、会場のコンセプトを示したスケッチです。このように起伏のある土地で、本来万博というと、300ヘクタールくらいの土地を与えられて会場設計をします。そこには6ヶ月くらいの間に、何千万人の人がお見えになる、初めてお見えになる方たちで、お年寄りもいらっしゃる、ハンデキャップの方もいらっしゃる環境で、安全で、わかりやすいものを設計しなければならない。愛知万博は紆余曲折がありまして、敷地は、最初の計画地の所では、オオタカが発見されまして、オオタカは、環境の頂点にいる鳥で、多様な動植物が生息していることが明らかになり、自然保護団体からの猛烈な反対があったりして、2転3転して、最終的に、愛知県スポーツ公園という場所を6ヶ月間だけお借りして万博会場にするということになりました。ところがこの公園は、非常に緑の起伏に富んだ所で、サッカー場や野球場があり、スポーツをするには、とても理想的な環境だったのですが、万博の敷地の常識から全てはずれてました。高低差はあり万博の終わった後には、もとの緑の豊かな公園に戻す、一切造成はしないという条件がついておりました。そうして大変せまい、一般的な万博の半分の面積で、特殊な生物が生息している環境には、一切手を付けてはいけないそういうゾーンが半分くらいありました。三重苦の大変難しい課題を与えられたわけでしたが、建築家というものは、へそまがりなところがありまして、予算の限度や敷地の制限は一切ありません、いくらでもどうぞ自由にお使い下さいと言われるより、きつい条件があるほど、じゃ、ガンバッテやってみるかということになるものです。そんな中で、考えたのが、真ん中のスケッチで、高低差がある中を、なんとか一周できないものか、それは、土を削ったりしないで、一定の高さで、空中を走るように、メイン道路ができないものか、幸いなことにスポーツ公園でしたから、サッカー場とか野球場とか平らな場所は、いくつかあったので、そこに各国のパビリオンを置くということにすれば、なんとかいけそうだなと思い挑戦しました。おかげさまで予想入場人員が1500万人でしたが、結果はその1.5倍の2250万人のお客さんをお迎えしました。

もう一人、鶴浦さんという女性ですが、万博の環境マネジメントのプロデューサーでした。愛知万博は環境万博ともいわれまして、廃棄物をださないとか、リサイクルとかリユースとか、環境に対するコンセプトがあり、環境プロデューサーが大変重要な役でした。彼女は国連大学での経験を買われて、この役に抜擢されたわけです。彼女は大船渡出身で、彼女のお父様は、大船渡で産婦人科の先生で、多くの方をとりあげた方で、今もお元気でいらっしゃいます。彼女は、万博期間中に結婚して、ロスアンジェルスを往復していました。2011年当時、彼女はロスアンジェルスに住んでいたのですが、震災の時には、たまたま気仙沼に帰っていて、津波に巻き込まれ、九死に一生を得る体験をしたそうです。震災当事、しばらく行方がわからなくて、大変心配したのですが、翌日大丈夫ということがわかり安心しました。写真は、彼女が被災した場所を説明してくれた時のものですが、すっかり髪の毛が白くなっていて、彼女の精神的ショックの大きさを表すものでした。南天の木だけが残っていて、それで、自宅の場所がわかるのだと説明してくれました。

もう一人紹介したい人は、三崎ともやすさんというギターリストです。この方は、盛岡でモンドリアンというライブハウスをやっておられて、野澤さんに連れて行ってもらい、一回で彼の演奏と歌声と話術に魅了させられました。彼は、マイク真木さんなどと同世代の人ですが、あまりテレビに出るということを好まないで、盛岡に移り住んで、演奏活動を続けておられました。我々の絵の展覧会に来ていただいて演奏していただいた時の写真です。この時、実は癌が発見されていて、結構つらい状況

の中で来ていただいたことが、後でわかり、申し訳なく思いました。彼の思い出を何とか残したいということで、彼の演奏している絵を描きました。彼がなくなった後、「トミーおじさん春をうたう」という、絵本を作りました。彼は犬が好きだったので、犬が小岩井の一本桜のところで演奏するというお話を作りました。ストーリーは、ここにおいでになるショウさんが考えて、僕が絵を描きました。地元の内沢さんという方が、編集やデザインをしてくれました。奥さんやお孫さんたちに大変喜ばれて、彼を思い出すひとつの記念になったかなと思っています。

それから、陸前高田に元役所だったかなり古い 100 年くらい立った木造の建物がありました。鵜浦さんから再利用できないかとの相談を受けて陸前高田に行った時、八木澤商店の河野さんにお会いしました。お味噌、お醤油を作っている立派な老舗を案内していただきました。鵜浦さんと野澤さんと河野さんがいらっしゃる写真です。それが 2011 年にすべて流されてしまったわけです。今は小学校の跡地に工場を建てて、たまたま、奇跡的に酵母菌が生き残っていたため、お味噌、お醤油の再生産ができています。

それから、今日お見えの臼澤さんです、大槌でがんばっておられる方で、被災直後から、ご自身も九死に一生を得た方で、地元の方々に寄り添ってサポートしておられます。写真は泥の木を使った獅子踊りですが、そういう地元の方を下から支えておられ、現代の宮沢賢治のイメージの方だと思っています。

これらの方々の支えとつながりの中で、東北とのつながりを育てていただきました。

そして、これまで、いくつかの被災地支援の提案をしてきました。これは、大槌町のひょっこりひょうたん島のモデルの所なのですが、巨大な防波堤を造るという計画に対して、ミドリのクジラと名づけまして、瓦礫や廃棄物で山を造って、それがひょっこりひょうたん島のクジラのような形にして、自然のやわらかい形態で、防波堤ができないものか、それ自体が四季おりおりの自然豊かな公園であるような防波堤にならないものかと提案したものです。横浜国大の名誉教授の宮脇先生なども同じような提案しておられます。臼澤さんもいろいろがんばってことあるごとに提案してきていただきましたが、なかなか下からの提案を上に向けていくルートがなく、やるせない感じが続いております。この写真は、大船渡の、鵜浦先生のお宅で野澤さんを交えて模型を説明をしているところです。

層構想モジュールという聞きなれないものと思いますが、私は、40 年ほど人工地盤の研究を続けてきております。どういうものかといいますと、段状の安全、安心な人工の地盤をつくり、ここに住宅を置いていくシステムです。しっかりした構造体をつくり、1 戸あたりの空間の高さは 7, 5m あって 2 階建てを建てられます。外側にテラスがあり、植物を育てたり、犬を飼ったり、ゴルフの練習をしたり、庭付きの一戸建ての住宅の集合住宅を都市に造って行きたい。これまでは、四角いマンションか一戸建てかの選択しかないので、こういう一戸建ての集合住宅として、ある程度公共化した手法で、ローコストで、品質の高いものつくっていく方法ができないものかと研究を続けています。当時は、通産省が高度化した情報やエネルギーシステムも組み込んだ新しい都市づくり産業を立ち上げることができないものかと研究を始めました。

マンションでもない、一戸建てでもない、第三の住宅として、新しい集住環境を作る、それぞれの住宅ユニットは、一定のルールの中で増改築もできるし、緑を植えたり、そういう屋外の生活も楽しみ、真ん中に、大きな吹き抜けの空間ができますので、こういう所に、商業施設を入れたり、幼稚園、保育園を入れたりもできます。

各住宅は工場生産した建物を入れていけばいいわけですが、在来工法で建てることも可能です。気仙大工さんの作ったものでも、プレハブメーカーのものでも、自由にに入れていけます。建築と、電気、エネルギーや給排水、そして情報などの都市のインフラも同時に整備していけるのが特徴です。建物として表面積が多いので、風力であったり、太陽エネルギーであったり、雨水を利用したり、そういう自然エネルギーも有効に活用できる。地形が傾斜していても、いろんな形に対応するので、あまり地形を改変せずにできるという特徴があります。このように空中に浮かせるようにすることで地表面の風通しを良くすることもねらっています。現在の社会が地球の表面積をあまりに多くを建築でカバ

一してしまって、地球が息ができなくなっている状況が、いろんな形で地球環境の大きな変化に結びついていると思います。足もとを従来の自然のエコシステムでつなげていきたい。自然の大地はなるべく開放して、上の方に住んで行くということを考えています。これは、被災直後に描いたスケッチで、上の方に高台移転があるにしても、下のほうに、避難的に斜面に沿うように造っていけば、どの階からでもまっすぐ行けば、山に向かって行けるという仕組みになっています。被災直後に模型を作って、陸前高田市の戸羽市長などに、ご説明して、なかなか面白いねと興味を示していただいたのですが、その後、国の復興関係の方、県の方とか、上位組織の方が入ってくると、市町村レベルで決められなくなったのでしょう、我々の提案も、上の方に上がって行くというようなことはなかったという状況であります。

このように、斜面をいじらないで、そのまま各階から山のほうにいけば、そのまま自然に避難もできる構造になっています。

一階が基本的に 7.5m くらいありまして、それがどれくらいの標高のところに建設するかということではありますが、基本的には 1 階には住宅はおかないで、万が一津波などが来ても、津波に抵抗しない仮設的なものでつくると考えています。

ユニットであるので、工場で作ったものをパッと持って来て、短期間のうちに施工することも可能ですが、将来の規模、機能に応じて、増改築やそういう可変性も持つ、フレキシビリティも持っています。集まって住むということの中から、コミュニティとしての結いの精神、助け合い、共有空間という中で孤立化しないことをねらっています。一般的には通路が裏側に通っていて、各戸に入るパターンが多いですが、ここでは、表の庭先に通路があって庭を通して家に入るパターンも、いいんじゃないかと思っています。開かれた庭側に通路ということで、必然的に出会いが庭を介して生じますので、挨拶を介して地域のつながりができてくる、仮設住宅での孤立化ということが問題化されていますが、昔の路地のような空間を持って、それを立体化していく、そういう提案をしております。

もう一つ、新しい人工地盤的な提案でフィンランドからのものです。私の知人のフィンランドの建築家からの提案です。ご存知のように、フィンランドは木材の国で、いろいろな集成材や、木材の高層住宅が造られていて、構造的にも耐火的にも、木材であっても、しっかりしたもので、例えば、火災があっても、周りが燃えたとしても、燃えしろが断熱材になるという燃えしろ設計があつて、木造であっても何時間耐えられるということが、しっかり証明されている。その間に避難できればいいわけで、これから、わが国にあつても、次第に木造の高層化ということが可能性として出てくると思います。今、被災地にむけた提案で、大きな立体のフレーム、立方体で、7 m 角のフレームで、先ほどの私の層構造と同じような高さで、7m なら 2 階建てがすっぽりはいるサイズである。これは、台湾の方で、ひとつ計画しているもので、何層にも積み重なっていて、7m、14m、21m、28m と非常に高くなっていますが、今回、東北の方で、使ってもらえないかと、もしそういう適切所があつたら、フィンランドの方から、材料を提供しますという申し出が来ております。フレームをフィンランドの方で、建築的にも、内容的にも、提供したい、せいぜい 2 層くらいで、30~50 戸の住宅を造ったらどうか、実験的に造ったらどうか、まず、実験特区のようなもので、どこかの自治体で手あげてもらえば、フィンランドの方で造ります。その中に入れるユニットは、ユニットをどういう風に埋めていくかについては、地元のニーズを反映して、半分はフィンランドの集成材のようなもので作り、あとは地元の気仙大工のような方に協力していただいて造った住宅をはめ込んでいく、そういう新しいフィンランドとわが国の被災地の間の協働プロジェクトの提案です。私はそういう適地を探して欲しいと言われてまして、たまたまこういう機会がありましたので、できれば、みなさんとのご縁の中で、規模に合わせて、敷地の規模に合わせて、ある程度 30-50 戸という中で、必ずしも住宅だけではなくていいので、公共施設も含めながら、こういう木造による立体都市づくりの可能性を実験特区ということでやってみたらどうかということです。

今、台湾で実験しているものですが、最終的には、そこのノウハウもふまえて、被災地の復興に協力したいという申し出が来ております。

右側に中国語ですが、反相城市とあります。城市とは、都市のことで、反相とは現在の都市と違ってそれに対応して新しい都市を造るという意味で、**PARACITY** とは、パラサイトとかは寄生という意味もありますが、従来のものから、また新しいもの付け加えて、違った発想で、都市を再来するというようなこと、これは、模型ですから、たくさん積み上がっていますが、私は 2 層分くらいで、フレームで 2 層ということは、建築でいうと 4 階くらいがいいのかなと思っています。多くの緑が立体的に構成されるような都市になります。私が先ほどから申しあげている人工基盤というようなコンセプトで、集合住宅なんだけれども、あちこちに立体公園が組み込まれているようなものと、かなりイメージが共有されるものです。

フィンランドの修正材は、すでに日本の防火認定などもとれています。基本的な素材は提供されるので、あとは、2 次構造物をどのように作るかなど、資金的、技術的な詰めを検討して実験的にどうかでやって行きたいと思っています。

右下にありますように、屋上に緑を植えたり、従来のボックス型ではない環境を、新しい都市のつくり方を提案しています。こういう都市ですと、さまざまな住民同士のふれあいというようなものが生まれてきます。そういう装置として興味があるかなと思っています。ここのところまでが、イントロダクションとしてお話しさせていただきました。

それで、先ほどお話しにありましたように、12 月にフォーラムが大槌で行われまして、増田前知事と横浜国立大学の鈴木学長に、お話しをしていただきました。増田さんは、今話題になっている人口の減少の問題を取り上げておられて、このままで行くと、絶滅集落どころか、絶滅都市が、どんどん日本の中で増えていく。日本中でのかなり中核都市といわれている都市においても、30 年後 50 年後には、消えてしまう都市があるという未来予測を語られました。特に人口構成などからみると、特に、20 代から 30 代の、赤ちゃんを産める女性の人口が将来半減する、非常に危機感のある話でした。今、出生率が増えたとしても、その効果がうまれるのは、何十年先となる長期的な深刻な問題だと増田さんは指摘をされておられます。若い、これからの社会を支えていく人たちの減少が激しい、これは、そう簡単に手を打てる話ではないのですが、ひとつの問題の核としてとらえていかなければならない。それでは、どうするんだ、まだ、具体的な効果のある提案はされてはいませんで、ただ様々な提案されていますが、それが、根本的な解決策になるかどうか、先がみえてない大きな問題になろうかと思っています。鈴木学長の方は非常に面白い提案がいくつかありましたが、鈴木学長は環境の方から、環境がいかに大事かということを、非常にわかり易い例で説明されていました。例えば、これは、鈴木さんの講演の画面を慌てて撮ったものですが、ライオンは一頭いくらかということです。ライオンは一頭、毛皮、つまり、殺してしまっても毛皮だけ売れば、1325 ドル、約 12 万円くらいにしかならない。生け捕りにして動物園に売れば、8500 ドル、約 80 万円。ところが、ライオンを生け捕りにしてさらに観光資源として、サファリによってホテルができたり、旅行社のツーリズムの通訳ができたり、そういう還元されて、一頭の価値が 450 万円になる。これは、下にあります、ピータースレッシャーという方のケーススタディをご紹介いただいたわけですが、密漁をやめて、観光資源とすれば、価値があがる。つまり環境というものは、トータルに守ってこそ最大限の価値を生み出すものであるということの説明されました。

この時のお二人のお話、人口の問題と環境の問題、これはひとつのキーワードになろうかと思いついて、どちらも非常に大きな問題で、解決策は非常に難しい問題なのですが、そのへんについて、今日は、私自身の考えを述べたいと思っています。

私は、語呂合わせではないが、この前もお話したのですが、これからは何か新しい力をソウゾウしていかなければならない。ソウゾウには、**creation** の創造と **imagination** の想像がある。ふたつはお互いが強く結びついているように思います。未来に対して新しい想像力が欠落していると未来に対する **creation** の創造力もできてきません。我々が今求められているのは、未来を的確に想像し、新しいものを創造するというふたつのソウゾウではないかと思っています。

農業の第一次産業の六次産業化ということが言われていますが、つまり、農業生産を行うことが一

次産業なのですが、それを商品にして売ることが、二次産業で、それをまた商品化したりするのが三次産業で、それを足し算して六次といっているのですが、本来一次とか二次とか三次とかはファースト、セカンド、サードですから、足し算をする、ワンツウスリーではないのですが、それをわかりやすくするために、ひとりの生産者がものを作り、それから売するような、そういう六次産業という例えで、語られることが多いのです。私はそれだけではなくて、それにやっぱり人間の問題をそこに加えていく必要があるんじゃないかなと思います。そこには、体験とか学習とかあらたな観光の要素を加えていくのです。地域の人口を増やすことを考えると同時にやはり、交流人口、場合によっては海外からの人も含めていろんな形で交流していく人口も計算に入れるべきだと思います。

それから、人口が増えないならば、一人の人間のパワーを倍増させる、3 倍にするという考え方も必要ではないかと思います。総合人間力というパワーの考え方です。今、日本はワールドカップのサッカーで苦戦していますが、ザッケローニ監督が日本に来たとき、日本には、三億九千万人の人口がいる、つまり一億三千万人の人が 3 倍いるのと同じだということを言ったそうです。サッカー選手に例えて、言ったのですが、二つ、三つのポジションをこなせる非常に器用な選手が多い。一人の選手が 3 つのポジションをこなせば、チームのなかに 3 倍の選手がいることになる。日本人は非常に能力の高い人が多いので、三億九千万人の人口の国と同じになるということ言っておりました。ここに彼のほめすぎな言葉でもあるかもしれませんが、ここにヒントがあるような気がしています。

人生 80 年とか 90 年とか珍しくない長寿の社会ができてきている中で、昔は、社会に出て、50 歳で定年になってその後リタイアし、60 か 70 歳で亡くなってしまう、そういう人生だったのですが、今は 50 歳以降、もう一回、人生をやりなおせるくらいの 30 年、40 年という時間が残されています。つまり人生 2 回やるぐらいの人間のライフスタイルが変わってきている。ダブルライフみたいな、例えば、一回目、商社マンとしてがんばってきたんだけど、第二の人生は農業をやるといっても、単なる老後という感じではなくて、二つ目の人生をやるだけのまだ時間も、元気さも残っている、そういうこれからのライフスタイルになるのではないかと思います。

そういう風にするためには、わが国の教育というものが非常に重要で、これから人口が少なくなってくる中で、これからの若者の能力が 2 倍 3 倍に発揮できる社会にしなければならないということで、教育ということが非常に大事なのですが、ここが率直に言って非常に心もとない。実は、一昨日も、長野県の川上村というところに保育所の設計のコンペの審査に行ったのですが、保育士さんたちと話をする機会がありました。皆さんもよく話に聞くとありますが、最近の子供って幼稚園、保育園で、転んだ時、手がでない、いきなり顔から落ちる子がいっぱいいるらしいのです、そういうのがありますかと聞いたら、そりゃもう全然めずらしくありません。ですから床を全部クッション材にしている。なんでそういうことが起こるかという、昔はそういうことがなかった。ハイハイをする時間が短いんだそうです、親もはって来ると、早く立てという、立ってくると早く歩くことを期待してしまう。昔は、ほったらかしみたいなこともあって、子供たちはひたすら、ハイハイをして自分の行きたいところに行っていたので、ものすごく手と胸の筋肉が発達してきたわけで、それが自然の成長だったわけです。ハイハイという自然の発達がなくなって、早くたって二足歩行にいくのが、よいことだと思うお母さんがいっぱいいて、歩くと手間がかからないということもあって、手の発達が遅いため、倒れ掛かってもとっさに手が出ないんだそうです。それから、回りに、おとうさん、おかあさん、おじいちゃん、おばあちゃんといっぱいいて、そして子供が少ないので、十分に面倒をみるわけです。例えば、食事のときも、子供は座って食卓で待ってるだけで、口のところに、食事がいっぱいでてくるものを、口を開けてパクパク食べているだけ。小鳥のヒナのように。

昔は違っていた。ごはんを手つかみで、ごはんをボロボロこぼしなら、食べていた。食べるということは、自分が食べたいものを掴み取って口の中に入れるという行為なんですけれど、口を開けて待ってるだけで、自分から手がでない、そういうお子さんが給食の時間などにいっぱいいるそうです。当然、手の発達が遅れば脳の発達に無関係ではないでしょう。そういうことを考えていくと、そういう子供が大きく育って、今の大人の能力の 2 倍 3 倍の力を発揮してくれるかは、非常に心もとない

気がいたします。

そういう中でどうしたらよいかを考えると、私はやっぱり、自然、自然の力を借りて、自然の中で子供たちを育てるといふことの重要さを感じるわけです。今、我々の建築の世界でいうと、幼稚園、保育園で建築家が意欲的に新しい建築が行われています。校庭からスロープで屋上まで、子供たちがそこを走り回られる、いろんなことをやっている保育園もあるのですが、全部やっぱり、人工的な環境の中で育っている。危険が伴ってはいけないということで、あちらこちらに手すりを設けて安全を確保している、それもある程度やむを得ないことかも知れません。昔の我々の時代の子供たちが持っていた、泥んこ中で、自然の中で駆けずり回って遊ぶということが経験として、なかなか身についていかない。そのへんが、私は、総合的な人間力が欠けていくことになっていくのではないかと心配している。ビオトープとか、ここのパートナーシップでもやられているような子供たちの自然の中での教育が重要性がでてくるのではないかと考えています。

もうひとつ、社会全体として、みていきますと、地方が衰退というものが指摘されてきている。これは、地球の隅々に、グローバル経済の流れが覆ってまして、従来の長年その地域で培ってきたローカル経済のノウハウが守っていけなくなって、すべてグローバル経済の資本主義の大きな流れの中に吸い込まれてきている、ブラックホールのようなものの中に吸い込まれている。グローバル経済とローカル経済がうまくバランスをとって、共存ということがかなり難しくなっている。これはわが国だけの話ではなく、世界中で感じます。これは、ひとつの大きな文化の崩壊ではないかと思っています。例えば、左側の、私のスケッチですが、去年モンゴルの方へ視察、調査をしてきた時のものです。何で行ったかという、モンゴルの首都、ウランバートルで、斜面にスラムみたいな形で人々が住み始めた。よく見ると、遠くにパオ、テントが見える、これは、本来こういうところに作るべき建築ではありません。広い草原の中にポツンとあり、何百頭の牛や羊や馬やそういうものを飼って、放牧している、これはもう 1000 年以上の歴史があり、地球を痛めることはほとんどない、草が伸びた所を巡って行きながら、厳しい冬はひたすら風の少ない岩陰で春を待つ、そういう生活を続けてきた。春から夏は白いものを食べる、白いものというのは、ミルクやチーズ、秋から冬の季節が厳しくなってくると、赤いもの、肉を食べるということで生活をしてきています。また、真ん中の絵は、鷹狩りをしているところで、日本の鷹狩りのような、小さな鳥を捕るというような鷹狩りではなくて、小さな鹿、ガゼルを捕る大きな鷹狩りをしている。短い期間でしたが、彼らと一緒にパオに泊まるというような経験をしました。非常に眼がいい、もちろんカーナビなどもないので、車で移動する時も、星を見たり、真っ暗な中で、舗装もしてないところがいっぱいあるわけですが、そういう中で道路の穴を見極める視力をもっている。つまり、五感が我々に比べ非常に発達していることを感じました。彼らは素晴らしい生き方をしてきた、かつてはモンゴル帝国は、ヨーロッパ、アフリカの方まで領地を広げ、彼らは都市を作るといふ思想はなかったのも、モンゴル帝国の人たちは、宮殿の跡とか、都市の跡という遺跡はひとつもない、彼らはあるところに行って、必要最小限の営みはするのですが、彼らが去って行った後には、地表は何にも破壊されていないというノウハウを持っていた。

ところが、現在ウランバートルの近辺にどんどん集まってきて、ここにあるのは、ソーラーパネルで発電装置がありまして、衛星放送で、テレビで CNN のニュースもみることができる。このくらいですと、別に自立して、現金がそんなにいるわけではないのですが、やはり問題は若者たちが馬ではなくてオートバイで放牧を始めた者もいます。そうすると、オートバイを買う、ガソリン代の費用が必要になってくる、そういう現金経済化が起こってくる。そうして、子供たちの教育の問題です、今までは、遊牧民たちは、ある期間子供たちを集めて、夏の間はそこで教えて終わりだったものが、それだとやっぱり学力が落ちるので、教育のために街にでる、そうすると、1000 年以上も続けていた誇り高き遊牧の生活を捨てて移り始めるわけです。政府から与えられた 70 坪くらいの敷地で、それが必ずしも道路に面しているとは限らなくて、そこに給水もなければ、排水もない。広い放牧生活では、トイレなんか穴を掘ってすませるわけですけど、ある期間いて、何平方キロメートルに 1 家族しか近くにいませんから、トイレから少々流れ出たとしても、自然の浄化能力で浄化されてしまうのですが、

こういう高密度の中では、トイレの排水や汚水が、地下水に浸透していってしまう、それから、水がないので、水を売りに来る業者から水を買わなきゃいけない、そういう生活を強いられてきた。街の中で、マンホールの蓋がない、鉄のマンホールの蓋を売ればお金になるので盗まれてしまう。それからコンクリートでできているマンホールの蓋も鉄筋が入っているので、盗んで、鉄筋の部分だけを売る。ちょっと雨が降るとこういう風に水があふれてくる。今までの環境から比べると、非常に悲惨な環境にあえて、現在の人たちは住んでいる。どうやってお金を稼いでいるかというと、結局、建設現場で、穴を掘ったり、ものを運んだり、瓦礫を片付けたりすることしかできませんから、彼らが自然に対して持っていた、生き物や自然に対して持っていたノウハウを全く生かすことができなくて、ひたすら労働力として、今働いている訳です。これが果たして、近代化として正しい道なのかに関して、非常に疑問を感じてしまいます。これだけ衛星放送なども発達してきている時代なので、遠隔授業のシステムなどを日本の ODA なんかにしてあげれば、遊牧民のライフスタイルを、子供たちが受け継いでいくシステムはできると思うのですが、そういうところに考えがいかないで、常にものだけの援助を行っております。

中国の古いことわざで、飢えている人に魚を与えると、それは一時だけのことなのだが、ところが魚を釣る技術を教えれば、その人は一生食べるに困ることはないという、言い伝えがありますが、わが国の援助のあり方、非常に即物的で、自立性がない。ものを与えても、メンテナンスができない。非常に高度な機械を与えても、故障して使えなくなっている例もいっぱいあります。

鈴木先生のお話しかからも、自然と共生をどう図っていくかということで、最近みなさんも感じておられると思うのですが、地球環境が完全におかしくなっていると思います。梅雨の雨の降り方も昔と全然違っている、昔の梅雨というものはしとしとと長雨が続いたものですが、今年なんかも凄い豪雨になったり、竜巻が起こったり、地球環境の変化が起こっている、これは多分、都市の造り方、我々のライフスタイルが急激に変化して地球に影響を与えている結果と思うんです。

これから人口が減っていく中で、だんだんと自然が荒れていく、手が付かない部分がいっぱいできてくるわけで、そういう自然というものを、どう扱っていくといいか、今、福島の一地域では、イノブタのようなものがどんどん増えてきている、今まで見られなかった状況が発生してきている、人口が減っていく中で、自然とどう折り合いをつけていくか、自然の戻し方、今までの我々の計画の中では、自然を整備していく方向性しかなかったものを、自然をどう戻していくといいのかという中で、我々はどう進んでいったらいいのかという論理から入らないとなかなかうまくいかないと思います。

私はこの前から総合環境力ということを行っているわけですが、環境の持つ力を、これは鈴木先生も同じだと思うのですが、切り売りしないで、総合的に、環境というものは、山から、平野へ、海までつながって、それから空までつながっている、そういう総合的な、トータルなネットワークとして捉えてそういうものを作りあげていくものです。それには、ある程度人間はコンパクトに住む、自然エネルギー活用して、活用すべきところと手をつけないところのメリハリをつけていくことが必要であると思います。

人口が減っているという問題に関しては、交流人口でバックアップしていく。人間の能力を2倍、3倍にしていくような形を作り上げて、トータルな人口は減っても、総合的な、マンパワーとしての人間力が落ちない仕組みを作っていく。新しいローカルな経済を作り上げていく、いままで、三陸などを含めても、一つ一つの都市が独立して、その中で作り上げてきたと思うのですが、ちいさな都市がネットワークを組んで、つながりをもっていく、このことはローカルな経済の話でも人の交流の話でもあります。そして、あえて、アートと書いてますが、経済の中では、ほとんど評価されていないアートではありますが、これが資源になる可能性というのも、私は大きなものがあると思います。

これは、まさにこの環境パートナーシップでのみなさんの活動そのものであると思います、ビオトープという考え方です。これは、先ほどの子供の教育にもつながってきますし、環境というものをどうやって人間と共存させていくかということともつながってくると思います。そこのところの新しい

計画の論理というものがまだできあがっていない。大槌町でも、浸水して、地盤沈下して湧水が吹き出てきたところですが、そこに盛り土をして、新しい街をつくろうとしています。私はそれより、湧水で地盤沈下したところはそのまま自然にして、そこで発生してくる、植物や昆虫、動物たちがどうやってそこで再生して増えていくのか、じっと観察していくそういうところにするということも、あり方として、ひとつあるんじゃないかと思う、子供たちが観察していく中で、環境とは何かを、そしてそれを新しい体験学習として、全国から子供たちがくるということになれば、新しい地域産業に結びついていく可能性もあると思います。今、東北の各地で行われているような、巨大なかさ上げ作業による、地盤づくりは、歴史とか生態系とか一切無視して新しい地盤を造ろうとしている。確かに建物を建てる基礎にはなるでしょうが、長年培ってきた自然という流れを断ち切ってしまうということで、これから先の環境の作り方として、正しいものであろうかと非常に疑問を感じます。

これは、ある大学、台湾の大学の中に作られた小さなビオトープの例なんですけど、もういつの間にか魚が棲み始めている、そこにある建物は大学の教室で、その横で、かえるがいて、とんぼがいて、学生たちがそれを観察し、調査している、意外に短時間に自然は回復してまいります。その中で自然のエネルギーを活用したり、エコファームなど、環境を資源として活用するということもできるわけです。

自然のエコシステムを生かしたこれからの環境のデザイン、今のような力づくで環境を作っていくのではなくて、うまく自然の力とあわせながら、環境コントロールしていく、やはり従来の田老の巨大防波堤のようなものは、20世紀の力任せの防波堤であったとしたら、21世紀は、やはりしなやかな自然と競合するような、自然をコントロールするものであってしかるべきだと思います。

それからもうひとつアートということに関して言いたいのは、先ほどのフィンランドの木造のフレームを提案してきた建築家、彼は、建築家であると同時に、環境デザイナーでもありアーティストでもあるわけですが、彼の作った、アート、アートといっても非常にスケールが大きいもので、ひとつのドームみたいなもので、子供に大人気なのですが、こういう地形を生かしてアートをつくっていく、その中で子供たちの情操教育を養っていくことは、さきほどの人間の本来の能力を生かしていく教育に重要ではないかと思います。

特にわが国においては、アートというものに対して、評価が低い、単に、美しい彫刻をおくことが、アートと捉えられがちであるが、アートとは本来は技術とかの意味もあるわけで、もっと環境と結びついて一体化して、新しい体験のできる場を作るものをアートとして捉えていきたいと思います。

左側のアートは、私が台湾で作ったモニュメントなのです、そしてこれは、愛知万博で使ったアートモニュメントをさきほどの長野県の中学校の庭に持って来て、こういう風に幼稚園の子供たちに可愛がられている、そういう事例です。

真ん中の足の高いアートは、さきほどのフィンランドのアーティストの作ったものです。台湾の金門島近くの干満の大きい、海の中にあって、満潮時には、ここまで海水が来て、ここから下は海水から出たり入ったりしていて、貝殻が、牡蠣がいっぱいついて、足がどんどん太くなって、だんだん姿がかわっていくというオイスターマンという名前のアートになっています。形自身が自然に造られていく、また、ソーラーのバッテリーが傘についていて夜はこういう灯りとして、自然と共生するようなアートです。

ローカル産業に関して、たまたまNHKのニュースを観ていたら、大槌で、やはり瓦礫を薪にするという、復活の薪、そういうのを吉里吉里国のNPO法人の芳賀さんという方がやっておられました。これを発想したのは、別のところからボランティアできていた方で、これだけの瓦礫があるんだったら、薪にしたらいんじゃないかと提案したそうです。薪にして、復活の薪として売り出したところ、非常に好評で、売り上げも上がっている。それに対して県外の若者が加わって、新しい薪産業ができてきたということがありました。まさに、こういう一次産業的なものが、新しい若者を呼び込んで、二次産業化したささやかな試みですが、下からひとつひとつ積み上げていくことが重要なのではないかと思います。そのへんが東北らしいこれからの方向性として、下から積み上げ方式でものを作

っていく、やはり、お役人さんが偉いという官尊民卑みたいなのところがありまして、お役人が決めて、民はそれに従ってやっていけばいいんだというところが、東北だけでなくわが国全体にありまして、例えば税金の使い方もそうですし、日本の企業は、自分の払う税金の使い道を提言することはできません。アメリカの企業のようにこういうものに使ってほしいと寄付をすると、その分が減税される仕組みがあれば、税金の使い道を指定できることになります。日本の場合、役所はとにかく使い道は自分達で決めるから、あなた方は税金を払いなさいというだけです。

さらに、重要なことは、伝統文化の継承、地域に対する誇りのようなものです。この写真は私の住んでいる、東京深川の夏祭りです。ここでも、震災直後は、東北から、いろんなみこし来て、いろんな支援に対して感謝するおみこしも随分でておりましたけれども、これらのことも地域のつながりとしての教育の一環になると思います。

これは、12月、フォーラムが大槌で開かれた時の、虎舞ですが、若い方とベテランの方が非常にうまく交流されていて、みごとなパフォーマンスをされていたのが、非常に印象的でした。こういうことがなされているのであれば、大丈夫だなという感を強くしました。

これは、自然との共生、いまさら言うまでもないことですが、こういう中で子供たちを自由に遊ばせて、自然の素晴らしさといものを教えていきたいと考えております。これは、私が、今、町おこしを少し手伝っている福島県の只見町という所で、ここは計算しますと白神山地より大きなブナ林の面積があるのですが、非常にPRがへたで、かたや世界遺産に白神の方はなったのですが、ここは、先日ようやくユネスコのエコパークというものに認定されました。この認定に、さきほどの鈴木先生が関わっておられまして、先生の推薦もあって、ユネスコのエコパークというものに認定されました。ユネスコのエコパークとはなんであるかといいますと、自然を守るべきエリアと自然と共存して、共生して生活していくエリアをきちっと分けて、環境保護と自然とつながる生活をきちんとどうバランスをつけていくかを探していこうという試みのモデル地域であります。これからは、先ほどから申しあげているように、人口が減っていくことが避けられないのであれば、自然をどう守って、共存していくかが、大きなテーマとなっていくと思います。へたすると自然の猛威の前に、人間の生活環境が吸い込まれてしまうこともあるわけですし、そのへんのやりかたというのも考えていかなければならないと思います。

それから、これは、スペインのビルバオというところの、パピーという犬の彫刻で表面に花が飾られていて、年に4回花がかわる。それを求めて観光客はリピーターとしてくる。工業都市なのですが、その住民たちがグッゲンハイム美術館を呼ぼう、グッゲンハイム美術館は、ニューヨークのセントラルパークにあり、世界各地にグッゲンハイム美術館をつくり初めています。ビルバオは、市をあげてグッゲンハイム美術館を誘致しました。そしてフランク・ゲーリーというロスアンジェルス建築家が挑戦的な美術館を作ったのですが、それが、ものすごい話題になって観光客が多くなって、工業都市が文化・観光都市に生まれ変わったという事例があります。ですから、アートというものの持つ力というのは、なかなかあなどれないところがございまして、単品の作品としてのアートというものもあるかもしれませんが、東北のような場合には、環境をうまく生かしたような作品、さきほどのオイスターマンのような環境アートというようなものをうまく組み合わせ、そういうことで、ひとつ大きな観光客を誘致して、自分達の環境を考える場にするということもあると思います。

それから、これは、新潟県の越後妻有というところで、3年ごとに、アートトリエンナーレが行われて、世界中のアーティストが越後妻有に住み込んで、1年かけて作品を作っていく訳です。最近、高齢化もすすんでいる地域ですが高齢者のおじいさん、おばあさんが、言葉の全然通じない海外のアーティストと一緒に、最初は冷たい冷やしたトマトをどうぞ食べなさいといったくらいだったのですが、最近はこの作品をどんどん手伝うようになって、アーティストも感激して、オープニング時には、そういう人たちを招待しています。この右側の作品ですが、セラミックなのですが、ただ姿形を、遠くから見て面白いというだけではなくて、越後妻有の棚田のきれいな緑の景色と一体化して楽しむというようなアートになっています。ですからさきほどから申しあげていますように、

大槌なんかは一回破壊された自然というものをどうやって再生していくか、人間のアートという新しい感性を組み込んで新しい環境を作っていくチャレンジが、テーマとしてあると思います。それがうまくいけば、非常に大きな観光資源になり、交流人口を引き起こす、そういうソースになると思います。

これも越後妻有の中で廃校になった使われなくなった小学校の中に一人のアーティストが一生懸命こういうアートを飾りつけていった、できあがったものも大事ですけど、作っていくプロセスの中で地元の子供たちや住民が一緒になってこれを作っていくそのプロセス自身が、もうアートでもあり、国際交流でもあり、文化交流でもある。

これは、私が台湾で手がけた例であります、日本とアメリカとカナダの建築家が、松竹梅というテーマを与えられて、私は松をつくりました。この松竹梅は新しい街に潤いと親しみやすさを作り出したいという民間のディベロッパーの計画の理念により生まれました。

それから環境教育ということになりますと、私が先日プロデュースした、長野県の川上中学の建物です。川上村というのは、唐松の産地なのですが、からまつというのは、昔から木が暴れて、建築材には使えないといわれた木なのですが、最近では、乾燥の技術や集成材の作り方が進歩しまして、建築資材としても有効に使えるということになってまいりました。そこにいる子供たちが中学の生徒なのですが、この子供たちのおじいさんたちが植えた、50年前の木が、切り倒されて、中学校の材料として使われようとしている。その伐採の現場をみているところです。これら自分達の教室を作る材料が、おじいさんたちの植えた木だ、これから自分達の教室になるという事が彼らの中に残る。今は中学は、できあがっているんですけど、非常に子供たちは丁寧にそうじをして、床を磨いていて、大事に使っています。生きた環境教育の事例であると感じます。もうひとつは、私が友人と NPO をやっているのですが、川上村の 12 歳以下の子供たち、女の子のサッカー大会を開いている、今年も 7 月 12 日、13 日あたりで全国から 16 チームが参加して開かれるんですけど、その回りにずっとからまつがある環境で子供たちが交流していく。それから川上村というのは、日本一のレタスの産地で、ちょうど夏の間は夜中の 2 時 3 時からライトをつけてレタスを収穫している。それが、朝には築地に並ぶというような所なんです、サッカー大会の最後日には朝早く起きて、参加した子供たちが、レタスの収穫を体験するというようなことをやっております。やっぱり子供たちには、単に豊かな自然を見るだけでなく、参加し体験をするということを記憶として持ち帰ってもらいたいということを願ったのプログラムであります。

そろそろ結論みたいなことを申しあげなければいけないと思うのですが、

人間の住むところはコンパクトに、ある程度の密度で住んだ方が、私はいいのではないかと思います、

そこで、共住空間とか、共有の街づくりの中で連帯感が生まれてくることもありますし、もちろんエネルギー的にも効率がいいということもあります。それから非常に密度が高くなりますので、孤立感もなくなるということもあると思います。

一方で、さきほどから何度も申しあげておりますように、これからはなかなか人間が手のつけられない自然というものがどんどん多くなっていく可能性があります、そういう中で、さきほどのユネスコのエコパークではないのですが、どうやって自然を守っていくエリアと人間生活と協働していくエリアと分けけて生きていくのか、つまり、どう自然とおりがいをつけて生きていくのか、私は、なるべく今の子供たちに、そういう自然の中で体験する空間を増やしていきたいと思うのですけれど、そういう価値を見直していくことが必要だろうと思います。

それからグローバル経済だけでなく、ローカルな経済の確立、例えば、収入が若干減ったとしても、支出を抑えられる生活ができれば、トータルとしては、どちらが豊かかはわからないとなるわけですし、そういう、もうちょっと自給、自立、ローカルな経済の確立と、新しい価値感、エコマネーとか、みんなで助け合う、そういうような経済、世界中のグローバル経済とは違う物差しを持った、経済のあり方というものを考えていきたいとも思います。

それから人口が減少する中では、交流人口の拡大、ここには、書いていませんが、ひとりひとりの人間力を2倍3倍にしていこうとすることで、総数は減ったが、トータルな日本の国の人間力としてはそんなに減らないという、そういう人間を作りたい、そのためには、教育の問題、特に環境教育の問題が重要になってくると思います。最後はやはり、この国に対する、誇り、歴史、そういうものをプライドとして持っていけるような、そういう都市を作っていかなければいけないと思います。

これは、私のスケッチなのですが、例えば、大槌のようなところをイメージして描いているのですが、地盤沈下をして水が湧き出しているようなところがいっぱいありまして、この辺は、かさ上げをして、土を大量に入れて、新しい造成地を作ろうとしているのですが、私は、それはそうではなくて、自然の大きな流れの中から生まれてきたのであるのなら、どうやって自然を再生するか、それを見守っていく、ビオトープのようなこの NPO がなさっているような一大実験環境として捉えていく、環境アートとか、バードウォッチングみたいなものを、この中で、どうやって子供たちの環境教育として生かしていくか、こういう中で環境アートをつくる時に、海外からのアーティストが住み込んでいく、アーティスト イン レジデンスという仕組みを作り、アーティストが子供たちや若者や住民たちと交流しながら作品をつくっていく、そういうことも大きな効果を生み出すと思います。外から来た人も、やはり体験をして、共有体験できる、そういう新しい体験観光のような形を作り出したい。これはさきほどの集成材のフィンランドのシステムを使ったイメージですが、3 階建て、4 階建て木造の都市で、あちらこちらに緑があるコンパクトな都市です。農業、林業もコンパクトに行っていきながら、家から生産現場に通勤をしていく。古くなった小学校の跡地で農業体験をするための合宿をするとか、同じように、林業に関しても、森の駅のようなところで、宿泊しながら、体験を積んでいく。こういうものを、新しい交流人口や体験人口で結び付けていくということをするだけでも、だいぶイメージが変わってくるのではないかなと思います。

それに対して、さらにさまざまな形で、国際的なシスターシティ、姉妹都市とか全国の支援してくれる交流都市や、ボランティアが交流することによって活性化していく、ひとつの方法としてどんなものかなと思うわけです。

自然というものをもっともっと身近に感じながら、自然の中で生かされている、その中で生きている、一人だけでなく、仲間がいる、そういう都市を目指していく、それは、津波によってゼロになったところに、だからこそ新しい白いキャンパスにもう一回、絵を描ける、そういうチャンスだと捉え、新しい実験都市を作っていけたらいいなと思っておりまして、及ばすながら私もできることがあれば、みなさんと一緒に作り上げていこうと思っております。

最後の写真ですが愛知万博のとき、写真を公募したもので、これはどうやって撮ったかわからないのですが、子供の表情と鳥たちが一緒に唄をうたっているような、子供の吹く音にあわせて、鳥たちが、踊っているような、そんな素晴らしい写真です。

小鳥たちも人間も同じ地球上で生かされている存在だということを実感させます。

ご清聴ありがとうございました。

野澤代表

ありがとうございました。予定しておる時間が少々ございますので、ご質問ありましたら、臼澤さん

臼澤さん

原田先生、どうもありがとうございます。

私のことを宮沢賢治にたとえていただきましたが、決してそうではなくて、ごくごく俗っぽい人間でありまして、ああいう状況の中で生かされた人間として、なにかできるかとしたら、と思って活動しています。

被災直後に野澤代表を介して、原田先生と大槌で、お会いしていただいて、街づくり、地域づくり、今も街づくりの提言としてお話しをさせていただきます。

しかし、大槌町のことをお話ししますと、計画と予算と、私たちは何も言えない状況になっています。ただいえるのはグランドデザインを作って、コンサルトと行政がグランドデザインと作って、その中で意見を言えるのは、ワンポイントのところに、公園のところに、どういうものを作るのか、建築にたとえれば、造作はもう終わって、もうドアのノブをどういうメーカーでつけるか、そういうところでの議論がされています。なんで、日本はあの、瓦礫を完全廃棄しなければいけないのか、私は原田先生に言われてはじめて、関東大震災の瓦礫を、横浜の山下公園の埋め立てに使ったという、ああいう発想をもっとしていただければ、ありがたいなと思っているんです。三千数兆億かかる防潮堤を作って、瓦礫に多大な予算を使って、べつな形でコンクリートで地球の表面を固めるって、3.11 で私たちは、多くのことを教わったにもかかわらず、同じようなことをやっている、ほんとに大変な、環境に対しては大変申し訳けない、そんな思いがしています。今、まだチャンスはあると思いますので、高台移転しなければならない、盛土しなければならない、木を切ったり、山を削ったり、大変予算がかかりますね、例えば、先ほどの、層構造の、一戸あたりの建築費どのくらい、予算的にどのくらいかかるのか、今大槌の土地は、震災前は坪 1 万円だったものが、今 15 万円になっています。アパートの家賃が 65000 円、それで、どうして若い人たちに帰って来い、95%が破壊された中で、どうして帰って来いといっても、アイターン、ユータンしなさいといってもなかなかできない、高い土地、アパート代。私はこのままで行くと、10 年くらいかかると思うのですが、人口がどんどん減っていく中で、是非層構造のことを、もう一度、私は町のほうに、近々説明会があるので、コスト的にどれくらいになるのか、今住めないところをどんどん作っているわけですので、是非、元いたところに帰りたいという人がたくさんおりますので、コスト的なことを教えていただければ、それを是非提言提案させていただきたいと思います。

野澤代表

ありがとうございます、非常に思いがたくさんあって、

原田さん

白澤さんのお話を伺って、

確かに、層構造のコストを出さねばならないのですが、従来の建築方と比べて決して高いものではない、

計算の根拠、背景を出して、もう一回整理してお出ししたいと思います。

従来の建築と違うところは、やっぱり、もう一層上に土地を作っているわけですから、土地を全部殺しているわけではなく、上空をお借りしている発想で造っているわけですし、ユニットを取り替えたすることも容易である。

先日石巻に行って復興担当部長とお会いしたのですが、非常に緊急で、住宅を造っているのですが、10 年、20 年で空き家が出る予想が明らかになっていますが、それだけの戸数作らなければならない、これから先空き家対策をどうするか、非常に問題になっているとおっしゃっていました。ですから、ユニットを取り替えられるのですから、それをどんどん高齢者施設に切り替える、都市は変化が激しい時代ですから、融通性と時間軸を持って、考えていかないといけない時代に来ているとそういう風に思います。

野澤さん

どうもありがとうございます、他にどなたか？

佐藤清忠さん

改めて層構造の作る住民同士のコミュニティの設計の見通しみたいなものと、再都市化ということ

で、居住している方々がどういうコミュニティをつくっていくのかという見通しと実施しているところがありましたら、教えていただきたい。従来の都市空間と違って、社会構成ができていくそういったものがあれば、

原田さん

通産省が 40 年近く前に人工地盤といったものを取りあげて、住宅を造る、都市を作るということをはじめたのは、当時の建設省に対する挑戦でした。いままで建設省の専任事項であった都市や住宅に切り込んだのですから。まあハウス 55 という工業化住宅プロジェクトを通産省がやったこともありました。

層構造のプロジェクトチームにはゼネコンも入っていたのですが、造船会社とか、機械メーカーとかも入っていました。技術的には、ある程度できた、問題は実際に建てる時に、建築基準法とか 許認可の問題なんですよ。

建築基準法の中に人工地盤という概念はありません。建築とは、自然の大地の上に作るが大前提になっています。

まだ完全な人工地盤のコンセプトにそったものは実現していないのはそのような法的な背景によるところも大きいのです。でもやっとそういうものに対して柔軟な考え方が出てきて、実験的な事例がいくつかできてきている、私はさきほど、フィンランドの建築を、実験特区みたいなものがないかと提案したんですけど、とりあえず震災復興のひとつとして特区として作り出していただいて、国交省と通産省の間で問題になっているところを全部、クリアしていけばいいんじゃないかなと思っています。そういう意味では、被災地の復興のプロジェクトは非常にいいプロジェクトではないかと思います。

ただそれも次第に時間の経過とともに従来のように硬直化していくことを恐れています。

野澤代表

ありがとうございました。ほかにどなたか

原田さん

フィンランドのもうちょっと詳しい資料をみなさんに提示をしたいと思います、もしこれくらいの土地があって、そういうものに使える土地がありましたら、それをフィンランドのほうとつめていきたいと思いますので、可能性をもって、実験的に皆様と作っていきたいと思いますので、ご協力よろしくお願いします。

野澤代表

どうもありがとうございました。それではみなさん拍手を。